

TNC
通信

2021
5月号

定期総会、6月27日に開催を予定！！

※総会の形式・進め方については県内のコロナ状況の進展をみきわめて、5月21日の理事会で検討し、次号で詳細を発表いたします。

「魯迅之碑」除幕60周年 一続・許広平女士について

除幕式での許女士の挨拶の全文を紹介してほしいとの声がありました。長文になりますが、記録の意味で、増刊号とあわせる形で紹介します。



写真④は記念植樹の碑、⑤は植樹された松から魯迅之碑を望む

【丑年アラカルト】

「牛に対して琴を弾ず」一魯の国の公明儀が牛に向かって曲「清角の操」を弾いて聞かせたが、反応を見せなかった。蚊や虻の羽音を弾いたら反応した、という。愚かな者に高尚な論を説いても無理な話。『祖庭事苑』



許広平女士のあいさつ

友人の皆様！ 熊谷岱蔵先生をはじめ魯迅記念碑建設委員会の皆様のご熱心なる提唱と、日本の各界各層の友人の方々の積極的な賛助により、心を込めて造られた日本・中国人民の友誼を鮮やかに示す魯迅記念碑がここに見事に完成いたしました。私はこの除幕式に参列できました事を心から嬉しく存じます。ここに謹んで熊谷岱蔵先生ほか建設委員会の皆様と、日本の友人の皆様にご心からあつく敬意を表します。

ご承知の通り、青年時代の魯迅はあたかも、国家と民族の危機にうながされまして、国家のために身命を

捧げようと、大志を抱いておりました。日本に留学していたころ、先に仙台で医学を学び、日本が医学を利用して明治維新を推進した経験に習い、祖国を救おうと考えました。当時、中国は「弱国」で一般の人々からは軽んじられておりました。けれどもその時にも、一部の誠実な日本人達は、中国に対して心からの友情を示して下さいました。

魯迅のあの広く大衆に親しまれている小品『藤野先生』は、この忘れがたい思い出と、深く中国に同情し熱心に中国をたすけ、両国の文化交流のために没頭された藤野先生に対する限りなき追慕の念を示すものであります。

その後、魯迅は、一国の人民が、たとえ身体は丈夫で健康でも、心に進歩的な思想がないならば真の開放を勝ち取る事ができないと覚悟し、医学をすて、人民の思想啓蒙に資する文芸運動にもつぱら力を尽くす事になりました。けれども藤野先生が魯迅に与えた強い印象は、なかなか消えがたいものであります。

魯迅はかつてこう書いています。「私にとって師と仰ぐべき人の中において、藤野先生はもっとも私を感激させ、激励を与えた一人である。先生の私に対する熱心な期待、倦むことのない教導は、狭い意味では中国のために、すなわち新中国に新しい医学が育つ事を期待されたものであり、広い意味では学問のために、すなわち新しい医学が中国に伝承される事に期待されたものである。先生の性格は私の目からみれば偉大である」と。

※5月増刊号へつづく→

『中国少数民族民話』「壮族 オオトリとエビ」2

「神さま、私はこの世の中で、自分が一番大きな生きものだと思います。そして、オオエビの髭があれほど大きいとは、考えてもみませんでした。どうか、私の思いあがりをお許してください！」そして、すっかり意気消沈し、元の島をめざして帰っていきました。

一方、噂に聞くオオトリでさえ、自分の比ではないと知り、オオエビはこれ以降、大いにおごりたかぶるようになりました。そして、大海のなかを自由自在に遊びまわって威張りちらし、他の魚たちのひんしゆくを買うようになったのです。

今日も今日とて、ヒラメやカレイの扁平をなじったり、タコの頭でっかちをからかったりと、近隣かくれなき鼻つまみになってしまいました。毎日こんな調子なので、一緒に遊んでくれるものもありません。オオエビは仕方なく、遠出をするようになり、少し疲れを感じてきました。ふと前方に眼を凝らすと、黒々とした洞穴がありました。「よし、あそこの洞穴に潜りこんで、ちょっとひと休み」。しかしそこは、誰知ろう、クジラの鼻の穴だったのです。オオエビはクジラの鼻のなかで、手を伸ばしたり脚を縮めたり、髭の汚れを掃除したりと、疲れた体をもみほぐし始めました。クジラは鼻のなかかむずかゆくてたまりません。「ハクション!!」と大きなくしゃみをしてしまいました。

オオエビはたまらず、「泰山」の頂上まで吹き飛ばされてしまいました。飛ばされたばかりではなく、頂上の岩にたたきつけられて、背骨まで折ってしまったのです。それ以来、オオエビには今にいたるも、背骨がありません。

※泰山は中国五名山の一つで、信仰の山。山東省にある。